

学生ボランティア活動の場に

今年4月、私が院長を務めるボランティア団体「みさわおもちゃ病院」が創立1周年を迎えた。おもちゃの修理を通して、子どもたちにものを大切にする心と、おもちゃを作ったり、修理したりしてくれる人たちに感謝する心を養ってもらうことを第一義としている。併せて、おもちゃ病院で活動する「ドクター」の交流の場でもあり、本音を言えば、社会に少しでも役に立っているという自己有用感を共有したいとの思いもあるだろう。

子どもたちとの応対に専念することができ。理想的なボランティア活動の在り方であり、一つの成功例と言えるだろう。1年という短い期間で、おも

私見 Sunday 創見

おもちゃ病院

ボランティア活動は、理想や熱意、努力だけではなかなか継続するのが難しい。全国のおもちゃ病院の多くは、実力ある院長が個人の力で運営しており、ドクターはその院長の下に集まっているが、活動に限界があるのもまた、事実である。

その点、みさわおもちゃ病院は大変恵まれた環境にある。活動場所は青森県立三沢航空科学館で、運営主体は科学館の指定管理者である「NPO法人ティクオフみさわ」だ。事務局はそのスタッフが担っているため、ドクターはおもちゃの修理や子

どもの修理に訪れた子どもたちにとれほどの効果があったかは分からないが、思わぬ収穫もあった。

それは、高校生のボランティア体験の場として評価されたことだ。参加してくれたのは、八



下谷 栄治

NORDD58
顧問事務所代表

しもや・えいじ
1951年、北海道生まれ。エネック取締役。みさわおもちゃ病院院長。室蘭工業大学卒業。

戸工大二高の生徒たち。単に修理作業を手伝っただけでなく、活動の改善点についても提案をもらい、こちらの期待以上の効果があった。

最近では、他の高校からも問

い合わせが増え、先月、県立三沢高の生徒が活動に参加した。おもちゃ病院が高校生の社会性の習得や人格形成の一助になれば、この上ない喜びである。

一方、高校生ボランティアを受け入れるわれわれドクター側にも、相応の使命と役割がある

込まれるおもちゃの大半が電池で動くものであり、親が買い与え、遊びの形態も独りで完結するものが多いということだ。

60代以上の方ならお分かりだろう。私が子どもたちの動くおもちゃと言えは、ほとんどがゼンマイバネやゴム、あるいは人力を動力源とするものだった。例えば、束ねたゴムの力でプロペラを回す紙飛行機や竹とんぼ、風車であり、仲間やグループでよく競い合ったものだ。空き缶を加工したカンテラ(ろうそく立て)やカン馬、竹筒で作る水鉄砲、Y字の小枝とパンツのゴムひもを組み合わせたゴム鉄砲(パチンコ)…。これらは、親や近所のおじさん、お兄さん、そして子どもたち自身が手作りしたものだった。

子どもたちがおもちゃを通して多くの人と関わりを持った時代が確かにあった。現代は確かに便利で、物質的豊かさにあふれ、おもちゃのバリエーションも増えたが、子どもたちが自然にコミュニケーション能力を身につけていくことが難しい時代だと、活動を通じてあらためて考えさせられた。